2019 年休眠預金活用事業

子どもの居場所とネットワーク推進事業

NPO法人子ども・若者サポートはみんぐ

舞い上がれ
社会を変える
みんなの力
休眠預金を活用した事業です

事後評価報告書

１．基本情報

(1)特定非営利活動法人子ども・若者サポートはみんぐ

(2)子どもの居場所とネットワーク推進事業

(3)公益財団法人長野県みらい基金

(4) 地域支援と地域資源連携事業

(5)草の根活動支援事業

(6)2020 年 3 月～2023 年 3 月

(7)長野県上伊那地域

２．事業概要

①社会課題：子ども・若者の生きづらさの背景には、教育、医療、家庭、就労、貧困問題などが複合化して存在しており、社会そのものが若者にとって生きづらいものになっている。

上伊那地域の長期欠席児童生徒は以下の通りだが、その周辺部にいる児童生徒を加えれば、さらに倍近い 600 人近い数になると予想される。また、高校生の不登校、20 代のひきこもり、発達障がい、生活困窮家庭等の困難を有する若者もかなりの数に上ることは想像に難くない。

m2018 年に「教育機会確保法」が制定され、子どもに休息の必要性と学校外の居場所が重要だと謳われたが、まだまだ地域に法律が浸透せず、子どもの視点を持った不登校理解がなされていない。こうした不登校への偏見から、さらに子ども・若者が自己肯定感を失い長期にわたって苦しむ状況が生まれている。子ども・若者に寄り添い、温かく育む地域力を高めていく必要がある。

対象グループ：不登校や不登校予備軍の小中学生とその保護者、障害を持った子どもとその保護者

②事業の概要（中長期アウトカム・短期アウトカム・活動）

（1）中長期アウトカム
上伊那地域が、多様で包括的な地域社会となることで、困難を有する子ども・若者やその家庭が孤立することなく暮らすことができるようになる。

（3）活動	時期
【アウトプット 1-1 に対する活動】1-1 小中学校不登校児童生徒の居場所が生まれる。	
1-1-1. 伊那市が改修した「allla」（アルラ）内に「居場所」を開設する。（週 2 日）	2020 年 6 月
1-1-2. 開設周知のための広報、見学会・語る会の実施。	2020 年 6 月
【アウトプット 1-2 に対する活動】小中学校不登校児童生徒の居場所において、多様な支援を提供できる。	
1-2-1. スポーツを通した居場づくりを実施。（週 2 回）	2020 年 6 月
1-2-2. 実施周知のための広報、見学会、体験会の実施。	2020 年 6 月
1-2-3. ゲームを通した居場所づくりを実施。（月 1 回）	2020 年 6 月
1-2-4. 研修会「子どもたちは、ネットやゲームで何をしているんだろう」児童精神科医　関正樹氏　の開催	2020 年 6 月
1-2-5. 体験活動を通した居場所づくりを実施。（年 7 回）	2020 年 6 月
1-2-6. 居場所利用者の子どもたちの希望を聞いてクローズドで開催する体験活動を企画する。	2020 年 6 月
1-2-7. 上伊那地域の不登校の子ども・家族を対象にした体験活動を企画する。	2020 年 6 月
【アウトプット 2-1 に対する活動】子ども食堂を上伊那地域の各地に生まれる。	
2-1-1. コミュニティカフェ「セジュール」にてはぐくみ食堂を開催（月 1 回）	2023 年 3 月
2-1-2. 他団体と連携して「allla」を会場にして「はぐくみ食堂」を開催する。	2023 年 3 月
2-1-3. 子ども食堂の手順をまとめたプリントを作成し、子ども食堂を立ち上げたいと希望している団体、グループに提供する。	2023 年 3 月
【アウトプット 3-1 に対する活動】生きづらさを抱える若者とその家族、及び支援者が学ぶ機会を提供できる。	
3-1-1.「リカバリーカレッジ」の開催	2020 年 10 月
3-1-2.「カウンセリング講座」の開催	2020 年 10 月

【アウトプット 4-1 に対する活動】地域の行政、学校、医療、産業、支援団体のﾈｯﾄﾜｰｸを構築し情報を共有する。	2023 年 3 月
4-1-1. 協力団体の活動紹介と上伊那地域の子ども・若者を育むための講座の開催（年 5 回）	2022 年 9 月
4-1-2. ＨＰを作成し、上伊那地域を中心にした子ども・若者に関わる団体紹介やイベント等の情報収集、発信をする。	2022 年 3 月
4-1-3. 各事業の広報手段、情報収集・情報発信のしくみが生まれる。	2022 年 3 月
4-1-4. ニュースレターの発行（年 3 回　5 月、9 月、1 月）	2022 年 3 月

③出口戦略

・伊那市教育委員会、駒ケ根市子ども課等と話し合いを持ち、事業費に補助金をお願いしていく。

・これまでの活動の成果をまとめ、今後の重要な役割を果たせることを発信し、企業・団体・個人からの寄付を募る。

３．事後評価実施概要

（1）実施概要

①居場所や体験活動に参加している子どもたちの活動や対話をとおして成長の様子を重点を置いた

②子どもたち、保護者へのアンケート・聞き取り調査

③保護者会の開催

④スタッフへのヒアリング

（2）実施体制

内部	評価全般アドバイス	ロジャーズ流カウンセラー
内部	直接観察分析　アンケート評価	子ども・若者サポートはみんぐ　スタッフ
内部	アンケート・インタビューの実施 報告書作成	子ども・若者サポートはみんぐ　スタッフ

４．事業の実績

4-1. インプット（主要なものを記載）

インプット				
(1)人材	内部：合計６人（コーディネーター１人、スタッフ４人）　外部：１人（自然体験指導員）			
(2)資機材	パソコン８台、タブレット７台、			
資金	①事業費 （自己資金含む・コロナ緊急支援追加）	内訳：直接事業費	管理的経費	②評価関連経費
	12,733,700 円	11,241,200 円	1,492,500 円	361,000 円

（3）コロナ対応緊急支援追加額　2,733,700 円

（4）自己資金　800,000 円

4-2. 活動とアウトプットの実績

（１）主な活動

〇居場所の運営　毎週月曜日・金曜日 10：00～15:00

〇スポーツを通した居場所　毎週水曜日 13:00～15：00

〇森カフェ　第２・４木曜日 13:00～15:00

〇スタッフミーティング　毎月１回

〇親の会　毎週４回（中川村・駒ヶ根市・伊那市２回）

①居場所での多様な体験活動　（調理・アート・ゲーム・イベント他）

・人間関係づくりや自主性を育む支援

②スポーツを通した居場所

・心身の解放や人間関係づくりの支援

③自然体験を通した居場所
・心身の解放や自主性を育む支援

①居場所での多様な体験活動　（調理・アート・ゲーム・イベント他）

オルタ（小中学生の居場所）
【調理活動】
2020 年度 7 回、2021 年度 6 回、2022 年度 3 回(12 月末)
パンケーキ、クレープ、クリスマスケーキ､ガトーショコラ、イチゴ大福、たこ焼き、ポップコーン、プリン、だんご、クッキー、蒸しﾊﾟﾝ、焼きそば、ﾌﾙｰﾂﾎﾟﾝﾁ、ﾊﾟｲ、ｽｲｰﾄﾎﾟﾃﾄ、ｱｲｼﾝｸﾞ など
【制作活動】
2020 年度 1 回、2021 年度 3 回、2022 年度 4 回(12 月末)※講師依頼
モザイクアート、マーブリング、クラフト、ミニツリー、サンドアート、指人形、クリスマスリース、経木行灯
日常的：ﾚｼﾞﾝ液でアクセサリーづくり、スライムづくり、ジグソーパズル、折り紙など
【その他】
散歩（商店街での買い物など)、花壇づくり、七夕、ハロウィン、クリスマス会、ダンス
文化祭（2022 度：手作りｹﾞｰﾑ大会、参加型電子ゲーム、ダンス発表、作品展示など）

②スポーツを通した居場所
伊那会場
【場所】
伊那市体育館及び公園、 a lll a 多目的室
【開設日】
水曜日・金曜日１３：００～１５：００

【活動内容】 基本：自分のやりたい運動や
屋内：バドミントン、卓球、バレー、バスケ、ドッチボール、ドッチビー、フリスビー、縄跳び、鬼ごっこ、ボッチャナド
屋外：遊具を使って鬼ごっこ・かくれんぼ、モルック、フリスビー、川遊び、マレットゴルフナド

駒ヶ根会場
【場所】
駒ヶ根市内体育館、周辺の公園

【開設日】
木曜日１３：００～１５：００
（2020 年 11 月～2020 年 3 月：隔週、2021 年度は毎週）
【活動内容】
屋内：ﾊﾞﾄﾞﾐﾝﾄﾝ、卓球、バレー、バスケ、ドッチボール、フリスビー、ストラックアウト、縄跳び、鬼ごっこなど
屋外：遊具を使って鬼ごっこ・かくれんぼ、鉄棒、ジャンボ滑り台、ｻｯｶｰ、川遊び、昆虫観察

③自然体験を通した居場所
はみんぐ×森ｶﾌｪ（自然体験）
【開設日】
第１・３木曜日 13:00～15:30（2020 年 5 月～）
【開設日】
駒ヶ根高原のキャンプ場
【活動内容】
薪割り、火おこし、焚き火を利用した、ブランコ、ハンモック、スラックライン、虫取り、川遊びなど

火育（地元まきストーブ店との連携）
※自分の手で燃料をつくり、火を熾しｴﾈﾙｷﾞｰを通じて得られる価値

・６月：不登校生の保護者が体験
・８月：２家族７名参加
※薪割り、火おこし、ポップコーンづくり
・11 月：5 家族 16 名参加
※薪割り、火おこし、木の実で炭づくり。これまで森ｶﾌｪに参加できなかった子どもたちも５名参加。

利用状況

	2020 年度			2021 年度			2022 年度（12 月末）		
	回数	利用延べ人数	平均利用者数	回数	利用延べ人数	平均利用者数	回数	利用延べ人数	平均利用者数
居場所（オルタ）	75	315	4.2	92	523	5.7	70	593	8.5
スポーツ（伊那市内）	82	481	5.9	92	588	6.4	67	479	7.1
スポーツ・自然体験（駒ヶ根市内）	10	51	5.1	44	211	4.8	23	141	6.1

○発行物

広報　成果物	発行日	発行部数	配布先
にじいろ通信　創刊号	2020 年 6 月 22 日	4,000	上伊那地域小中学校、教育委員会、公共施設
にじいろ通信　第 2 号	2020 年 10 月 21 日	10,000	上伊那地域小中学校、教育委員会、公共施設
リカバリーカレッジ　ちらし	2020 年 8 月 23 日	100	サポステ、きらりや、ひきこもり支援機関
にじいろ通信　第 3 号	2021 年 4 月 29 日	2,000	上伊那地域小中学校、教育委員会、公共施設
不登校とは、ヘルプを求めてくれた子どもたち	2021 年 4 月 17 日	250	上伊那地域小中学校、教育委員会
にじいろ通信　第 4 号	2021 年 11 月 25 日	1,500	上伊那地域小中学校、教育委員会、公共施設
森カフェ　ちらし	2022 年 4 月 20 日	500	上伊那地域小中学校、駒ケ根市小・中学校
映画会　ちらし	2022 年 11 月 1 日	200	上伊那地域小中学校、公共機関
報告書	2023 年 3 月 22 日	290	上伊那地域小中学校、教育委員会、支援機関

（2）アウトプットの実績

①アウトプット	②指標	③初期値／初期状態	④目標値／目標状態	⑤目標達成時期	⑥実績値

1-1 小中学校不登校児童生徒の居場所が生まれる。	地域別子どもの数	１カ所／ 伊那市	1 か所／伊那市	2020 年 6 月	毎週月・金 10：00～15：00 開設
1-2 小中学校不登校児童生徒の居場所において、多様な支援を提供できる。	様々な困難を有する子ども・若者へのヒアリング ① アンケート調査 ②参加者数	0／ 伊那市	① 1／年 ② 20 人／回	2023 年 ３月	毎週水・金　スポーツ 13：00～15：00 実施 隔週木　森カフェ 13：00～16：00
2-1 子ども食堂を上伊那地域の各地に生まれる。	子ども・若者その家族の支援団体	上伊那地域子ども応援ﾌﾟﾗｯﾄﾌｫｰﾑ 22 団体	上伊那地域子ども応援ﾌﾟﾗｯﾄﾌｫｰﾑ 40 団体	2023 年 3 月	上伊那地域子ども応援プラットフォーム 34 団体
3-1 生きづらさを抱える若者とその家族、及び支援者が学ぶ機会を提供できる。	① 参加した若者の数 ② アンケート調査	0	① 14 人／回 ② 参加者の満足度 70%以上	2023 年 3 月	当事者の研修会 2 回 家族・支援者研修会 8 回 満足度 70%以上
4-1 地域の行政、学校、医療、産業、支援団体のネットワークを構築し情報を共有する。	① 情報の受発信のしくみができる ② 連携した各分野の機関（団体）数 ③ 連携によって実現した企画数（実数把握） ④ 広報情報の効果的な受発信	① なし ② なし ③ なし ④	① 情報共有のﾈｯﾄﾜｰｸ ② 支援機関の実数把握 ③ 30 企画/年	2023 年 3 月	HP 作成 HP での情報受発信の人材育成によりネットワークが生まれた。

4-3. 外部との連携の実績

〇伊那市教育委員会子ども相談室との連携により保護者、児童生徒の支援

〇スクールソーシャルワーカーの連携による支援

〇伊那市議会文教委員会の視察、活動説明を行なった。

〇長野県みらい基金の伴走支援により、いいだ人形劇センターの人形劇公演、人形作りを体験した。

〇NPO 法人伊那まち BASE の施設を利用して子ども食堂、子どもの体験活動(食育)を実施した。

〇地域おこし協力隊となって伊那に来た若者たちがオルタのさまざまな活動に参加してくれた。

〇駒ケ根こころの医療センターとの連携による子どもの支援

〇駒ケ根市子ども課　不登校支援会議出席により情報共有

〇支援コーディネーターが、オルタ利用の児童生徒の在籍校で実施される支援会議へ出席し支援の方向性を確認した。

〇伊那市内の子どもの居場所を運営する 3 団体（フリーキッズ・ヴィレッジ・伊那まち BASE・はみんぐ）で伊那市子どもの居場所ネットワークの設立し、行政との連携を強化していく。

〇伊那市教育委員会との意見交換

〇伊那市長との懇談会

〇伊那市民生委員の方々がオルタの視察に来られ、子どもたちを取り巻く状況について説明し意見交換をした。

〇伊那市ミドリナ委員会との連携により月 1 回、鳩吹き公園でたき火の日を開催することとなった。不登校の子どもたちの新しい居場所の一つとして、オルタの子どもたちや、親の会に情報を提供した。

５．アウトカムの分析

5-1．アウトカムの達成度

（１）短期アウトカムの計画と実績

①短期アウトカム	②指標	③初期値/ 初期状態	④目標値／目標状態	⑤目標達成時期
1-1 不登校傾向がある子どもたちが､居場所で安心して自己決定を尊重されて過ごすことができ、自己肯定感を高めて成長していくことができるようになる状態。	① 居場所来所者、参加者の満足度（保護者・子ども観察）	個々の来所持の状態 孤立　学校に居場所がない	向上度 人間関係のこじれ 学業　学校のシステムに合わない	2023 年 3 月
1-2 個々の子どもたちの自主性が育ち自立に向かって進むエネルギーが育まれる状態。	'①様々な困難を有する子ども・若者へのヒアリング アンケート調査 ② 参加者数	2019 年度からスポーツを通した居場所を週 1 回開設する	多様な居場所参加者数（年間） ① ｽﾎﾟｰﾂのべ 500 人 ② 体験活動のべ 200 人	2023 年 3 月
2-1 上伊那各地の子どもたちが、安心して徒歩で行くことができる居場所が増え、子どもや保護者が孤立しないようになる。	居場所運営者(アンケート調査)	2019 年～開始時のこどもの状況	子どもの居場所での満足度　様子	2023 年 3 月
3-1 生きづらさを持つ若者とその家族､支援者が、学ぶ機会を持つことによって、若者が自立に向けた一道を歩んでいくことができる状態。	① 参加者の満足度(アンケート調査)	なし	満足度　意欲の向上	2023 年 3 月

4-1 上伊那地域の子ども・若者に関わる機関・団体・学校がネットワークを構築し、情報を共有することで地域のリソースをより詳しく知り、支援を迅速かつ適正に行うことができる状態。	ネットワークによって、子ども支援の種類、回数、連携、内容の向上が図れる	2021 年度から実施予定	連携エピソード	2023 年 3 月

（2）アウトカム達成度についての評価

1-1　不登校傾向がある子どもたちが、居場所で安心して自己決定を尊重されて過ごすことができ、自己肯定感を高めて成長していくことができるようになる状況。

〇観察

A さん

　国語、算数などの教科学習への拒否感から学校へ行けなくなったが、2 年間オルタに通う中で、1 時間ほど皆と離れて個別の学習支援を受けるようになった。

B さん

　オルタに来始めた頃は、母親と二人で卓球を 1 時間ほどやり、スタッフや隣のスペースにいる子どもたちと言葉を交わすことなく帰っていたが、徐々にボードゲームに加わるようになった。話してコミュニケーションをとるより、4 コマ漫画を描いて自分のことを伝えることが得意であった。やがて、よく話すようになり、漫画を描く機会が少なくなった。

C さん

　初めは静かで自分をあまり出せず、誘われると断らない面があった。ダンスやスポーツでは活発に活動ができ、オルタの日常の活動の中でも「いやだ」と言うことができるようになった。

D さん

　来始めた頃は折り紙や工作などに取り組み、チックの症状が目立っていた。ボードゲームなどを皆でするようになると、その場をリードしてまとめ、スタッフとも対等に話すようになった。文化祭では複数参加型の電子ゲーム大会を進行し、周囲への気配りができた。

E さん

　D 児とかかわることが楽しみで、オルタへ良く通うようになった。D 児が来ない日でもほかの友達とゲームの話などでかかわることができた。

Fさん

兄と一緒にオルタに来るようになった。行動力がありゲームの進行役を進んで務めた。中学校への進学を機に登校するようになった。学校が平日の休業日になる場合には、利用している。

Gさん

母と一緒に午前中来て、好きなアイロンビーズやタブレットで過ごし、スタッフや他の子どもと会話することはない。文化祭への取り組みの中で、皆の話し合いを聴いていて、手作りゲーム大会の景品をアイロンビーズでつくることを考え、数多くのキャラクターなどの作品を作った。文化祭へは参加しなかったが景品をとして好評であった事を伝えると、嬉しそうであった。

Hさん

一番最初からの利用者で、アクセサリー作りや調理活動や折り紙などで活動の中心になっていた。ボードゲームについてもよく理解し取り組んだ。子ども達の人数が増える中で、人間関係に悩んで苦しい時期があった。

高校へ進学後暫くして、母親と一緒にボランティアとしてオルタにかかわるようになり、「自分も同じだったから」と、元気のない子に気を配ってくれるようになった。

1-2 個々の子どもたちの自主性が育ち自立に向かって進むエネルギーが育まれる状態になる。

中間評価の際、信大子どもの心診療部の樋端先生(精神科医)から以下の助言をいただいた。

○ 小学校低学年の児童は、オルタ、はみ×スポで過ごすことが「とても楽しい」「楽しい」と感じている一方、小学校高学年、中学生になってくると、「とても楽しい」という回答がなくなり「楽しい」にとどまる。

○ 小学校低学年の児童は、オルタ、はみ×スポで自分がやりたいことが「とてもできる」と回答が比較的多いが、小学校高学年、中学生は、「あまりできない」と回答している。

【樋端先生より】

それぞれの子のモチベーションに合わせて、いろいろな選択肢を提案出来ることが大事です。誰かと一緒に活動するということが楽しい人もいれば、勝ち負けにこだわる人もいるでしょう。それらにはあまり興味がなく身体を動かすこと、出来なかったことが出来るようになること、教えることに楽しみを見出すなど人それぞれです。楽しみ方もいろいろありますが、自分が楽しいと思えることでやってみたら、そこで別の楽しみを知ることもあるかもしれません。スタッフも本気で自分の楽しいと思えることを伝えたり、別の楽しみ方を伝えたり、子どもが楽しいと思えることを面白がって

一緒にやったりできるのならそれでいいのかなと思います。
〇スタッフや友だちとのコミュニケーションについて、子どもたちからは、「コミュニケーションがとれている」という回答が得られた。
【樋端先生より】
まじめで良い子、過敏で表出が弱い子は過剰適応になりやすいです。コミュニケーションは双方向であり、理解コミュニケーションと表出コミュニケーションがあります。その双方があって、はじめて対話が可能になります。理解コミュニケーションの支援としては、場のルールやその理由、選択肢などが、できれば視覚的、具体的、肯定的にわかりやすく示されている必要があります。表出性のコミュニケーションの支援としては子どもの側からの拒否の選択肢や、見ているだけなどの選択肢も示され、個別に本人がやりやすい方法で落ち着いて表出できるような関係性や時間、場所、手段を保証する必要もあります。そして表出してよかった、相談してよかったと思えることから、コミュニケーションマインドが育ってきます。その上で、子どもも大人も、おたがいの体験を否定されず、原因追求せず、表出できる心理的安全性が高い対話の場を作れるといいと思います。

〇個々の子どもたちに合わせた支援となるとどんどん個別対応になっていくが、小グループでの活動の中だからこそ得られる成長の要素もある。個別と集団のバランスをどうとっていったらよいのか。

【樋端先生より】
個別と集団をどうアレンジしてマネジメントしていくかは永遠の課題ですね。不登校の子どもは、過敏だったり、他人には興味が薄く集団は苦手だったりするタイプの人もたちが多いと思います。それなのに学校では刺激が過多で、行事や部活動などでも一つの活動に様々な目的を入れ込みすぎしんどさのほうが多いということもあるでしょう。活動への参加の方法や対人距離、刺激のコントロールなどが十分に配慮された場で、彼らが興味を持つことが多い、例えば電車や漫画アニメ、軽スポーツ、ボードゲーム、自然観察など、自分が興味のあることから一緒に活動すると徐々に仲間意識をもてたり、社交ができたりということもあります。まずは人を嫌いにならずに、人と一緒にいるのも悪くはないなと思ってもらうところからでしょうか。期待していなかったが、意外と楽しめたというところから世界は広がっていきます。子どもたちが嫌いなものが増えず、好きなことや出来ることが増えていっていれば大成功です。

樋端先生が示してくださった支援の視点を軸にして、子どもたちと活動してくる中で、子どもたちがさまざまに活動の幅を広げ、アニメの冊子を

作ったり、文化祭を企画したいという提案があったり、ものづくり等自分の好きなことやりたいとこに取り組むようになった。子どもたちのエネルギーの高まりをことあるごとに感じることができた。やりたいと言えることばかりではなく、やりたくない、興味がないことに誘われたら断ることができるようになった子どもたちもいて、エネルギーの高まりとは、主体的にこのごとに関われる力なのだと実感した。

2-1 上伊那各地の子どもたちが、安心して徒歩で行くことができる居場所が増え、子どもや保護者が孤立しないようになる。
児童生徒の観察
I さん
スポーツで当初は母親とだけバトミントンや卓球をしていたが、ドッチボールや鬼ごっこなどに誘うと、母親と一緒ではあるが他の子どもたちと関わりが出てきた。
J さん
スポーツで当初は多動で衝動的な行動があり、自分のやりたいことだけしていたが、
自分の提案した運動に皆が参加してくれると、嬉しそうに一緒に競技ができた。
K さん
自然体験（森カフェ）では最初は母親にべったりであったが、スタッフとスラックラインやブランコなどするようになり、自分で遊ぶようになった。
〇達成度
参加している子どもたちの行動観察や対話により成長の様子をみてきた。子どもたちが主体的に参加している様子がみられた。
〇達成度
　コロナ禍による自粛生活の影響が大きく、当初の計画通りに進めることができなかったが、コロナの感染予防を考慮した居場所の活動として野外活動を企画したところ、子どもたちの心身の解放という意味でも、興味関心の高さなどからとても効果的な取り組みだと知ることができた。
【親御さんの感想】
・小学校に入学以来、1 日として親子ともに気の休まる日はありませんでした。私たちも、学校にとにかく行ってくれないと！という苦しさでした。コロナ禍に入り、学校が始まった時から毎日、腹痛、便秘、早退の毎日でした。いよいよ大泣きして学校を拒否した日、静かな所に連れていき、どんなに苦しかったか本人から全部話を聴きました。はみんぐを知り、1 度見学に来た時から、「はみんぐに行きたい」と言いました。その日以来、腹痛も便秘も一度もありません。オルタで自分の時間を過ごし、はみスポで走りまわり、森カフェで虫を捕まえ、たき火をし、自然の中でのびのびと過ごしていま

す。こんなに溌溂としている姿は、学校に行くことが当たり前と通わせている時にはわからなかった。そして、本人の好きなこと、得意な事、やさしさ、思いやり、学校へ行っている時には見えなかったことが見えてきました。苦手なことにチャレンジ‼乗り越えるように‼とついついそう願っていた毎日がどんなに本人を苦しめていたか。
・はみんぐのスタッフの方々の一人ひとりに向き合って、大切に思ってくれる。子どもたちは、それを感じるからこそはみんぐが大好きです。ずっとずっと行きたいと本人は言っております。はみんぐに出会わなかったら、一体どうなっていただろうと思います。子どもたちの居場所として、私たちは、はみんぐの皆さんに助けられました。ずっとずっと続けてほしい居場所です。

2–1 子ども食堂を上伊那地域の各地に生まれる。を実現するために、2-1-1、コミュニティカフェ「セジュール」にてはぐくみ食堂を開催（月 1 回）2-1-2 他団体と連携して「allla」を会場にして「はぐくみ食堂」を開催する。2-1-3. 子ども食堂の手順をまとめたプリントを作成し、子ども食堂を立ち上げたいと希望している団体、グループに提供する。を計画したが、2020 年に伊那市中心市街地の再開発計画の為、はみんぐが運営するコミュニティ・カフェ「セジュール」の取り壊しが決定し、2021 年 3 月で閉店となった。コロナの感染拡大という厳しい状況もあり、なかなかアウトプットの実現には困難があった。しかし、コロナ禍の状況だからこそ子ども食堂は必要とされているのではないかという思いを共有し、２０２１年度は、新しく生まれた子ども第三の居場所「伊那まち BASE」で「かぞく食堂」（ひとり親家庭にお弁当の配食をする）グループの立ち上げ支援をした。2022 年度は、上伊那地域子ども応援プラットフォームとの連携により、子ども食堂や子どもの居場所の立ち上げ支援、ボランティアの発掘、ネットワーク構築を進めることができた。子どもの居場所「オルタ」の文化祭に合わせて、新しく生まれた「月日夜子どもパン屋さん」がポテトサラダパンとレーズンパンを子どもたちに届けることができた。子ども食堂の手順をまとめた冊子の作成については、コロナの状況によりその都度判断したり、工夫しなければならないことが多く、コロナ前に培ってきたノウハウが通用しないということでプリント作成・配布をとりやめた。

3-1 生きづらさを持つ若者とその家族、支援者が、学ぶ機会を持つことによって、若者が自立に向けたー道を歩んでいくことができる状態。
研修会後のアンケート
・保護者、地域、学校の意識革命が必要。学校神話が徐々に変わっては来ているがなかなか抜け切れない。学校が変われないのなら情報提供をしてくれれば良い。
・今までの自分の考え方やこどもへの接し方でモヤモヤしていたものがあり、もっとこうしようという事に気づけた。今までは、for you だったが、今から with you でやりたいと思う。親として、親も人生楽しんでるという姿を見せて行きたい。

・いつまでたっても「学校」という所に大きく依存してしまう気持ちが取れない自分だったり、社会がある中、それはほんの一部でしかない事を改めて話を聞いて思った。子供たちとの今を大切に、同じ目線でよく話を聞くという事を大切にしたい。
・子どもと同じ目線で考える。とても大切な事だと感じた。仕事柄、学校へ行くことがありますが、一つの教室を見渡しても多様な子がいる。先生が見られない部分もある。周りの環境は合わせる必要はなく、生きたい生き方でいけば良いと思う。
・見る方向を変えるだけで、視点を変えるだけで、全然世界が変わる。今まで、自分の子供が不登校をしていた時、こんな考え方ができたら自分も子供たちもあんなに苦しまなかったのだろうと思う。
・若年世代として sos 発信をしているケースがとっても共感できるところがありました。
・不登校のことを詳しく知ることができました。過去の自分に重ねてみたりして「ああ、そうなんだ。」と改めて感じた。
・子供の気持ちや権利について学べて良かった。この先、甥っ子と接したり、その他の子供と接するのに、「大人と子どもは対等」という意識を大切にしたい。"
・成人したわが子二人が不登校を経験していて、今生活している中で、何か他の人の力になれるといいなと思える話だった。
・関わり方、考え方が分かりやすくまとまっていて、関係する人たちのテキストになる内容だった。"
・体験を一つ一つ丁寧に振り返ってそこから学びこれからの社会に役立つ智慧を伝えてくれてよかった。
・人は人からしかエネルギーを貰えることができない。今回の研修で納得した。
・不登校経験がどういうものかとても分かりやすかった。
・言葉の選び方はとても分かりやすかった。
・全てを網羅した高橋さんのお話、全ての教員学校関係者に聞いてほしい。
・子どもの話を聞く 5 か条、心に留めたい。
・「子どものために」と動いていた自分に気付いた。学校に対してどのように関わっていくといいかヒントになりました。"
・お話の内容は全くその通りだと思った。
・私も高校の時不登校だったが、理由は不明だが、ﾈｶﾞﾃｨﾌﾞな心理にはならず登校しないことに全く負い目を感じなかった。そのような心理状態になれた原因が分かれば何かお役に立てるかもしれないと考え中。"
・一緒に働いたりしていて、特に差別的な職場ではなかったのでご本人の困り方が改めて知れた。
・当事者の話が聞けてとても有意義だった。もっと広く周知されたらと思った。とてもいい研修会だった。

・LGBT について初めて正しく理解する貴重な時間だった。異性愛者が大多数なのかどうかわからないけれどホモ、ゲイは同性愛者と知っていても異性愛者のことをヘテロセクシュアルと知っている人は少ないと思う。当たり前だと思っているとき、実は何も見えていない事に改めて気がついた。
・とてもとてもここまで来るまで苦しかったんだろうなと苦しくなった。自分自身も苦しくさせている側にたちかねない子育てをしているので、自分の子ども、これから大人になる子どもたちに、苦しくさせない世の中を作っていきたいと思った。
・いろんな場で(新聞など）LGBT についての知識はあったつもりだったが、生い立ちからこれまでの実際をまとまって伝えて下さったのは有難かった。
・自分自身に戻って考えさせられた時間であったのは今回の収穫だった。「男らしさ女らしさ」に抵抗はずっとあったが中学の中で学生服を着る～の問いかけに、それもやってみたかったと思った。"
・芸能界ではＬＧＢＴの人たちが活躍し、世間ではだいぶ認知されてきているが、私たち（６０代）くらいの年齢では小中高大の時は男女が明確に差別されており、頭では LGBT の方もいることは分かるが、気持ちではなかなか受け入れられない自分がいる。
・性教育にも関係しており、心は男女の差別がなくなっても、体は男女は明確に違い、手術やホルモンの処方をしない限り嫌でもその体と付き合って行かなければならず本当に難しい。
・『アウティング」の大切さ（やってはいけないという事）のもう一人の原ﾐﾅ汰さんです。高橋さん！"
・性の多様性に対してもっと柔軟になろうと思った。"
・具体的な取り組みにはまだ時間がかかるが、少しずつ理解されていくことがうれしく思う。しっかりとした話が聞けて良かった。"
・生まれる前からの性の役割のすりこみがとても分かりやすかった。
・クイズで「男性がロングヘアのかつらをつけてスカートをはいたら？」という所で、「決めつけないで欲しい。それは性別ではなく個人の自由だと思った。
・シスジェンダーヤトランスジェンダーの問題ではないと感じた人も多いのでは？
・とても辛い体験をわかりやすくありがとうございました。"
・自分のことを知らないと、自分が色眼鏡（男の子らしさ、女の子らしさ）をかけていることすら気づけないなと思った。
・こんな機会を得て、自分に知らずに持っている色眼鏡を知っていくきっかけになって良かった。そして、気づけない人はまだまだたくさんいると思うけど、知った人が広めていけたらなと思う。"
・LGBT・・・学校で子ども達が学習してきた。性について、見た目で人を判断しないということを子供たちと話した。ですが、深い話だなと感じ、本

日もお聞きしました。
・少数派、多数派でまだ日本の普通は多数派で常識化されている面が強く少数派の人の生きにくさは強いと感じる。普通＝多様性・・・どこでもそういう世の中に広まって欲しいと強く思った。

4-1 上伊那地域の子ども・若者に関わる機関・団体・学校がネットワークを構築し、情報を共有することで地域のリソースをより詳しく知り、支援を迅速かつ適正に行うことができる状態。
「アッチコッチステーション」というＨＰが生まれた。
　2020 年度末に「信州上伊那子どもカフェｎｅｔ」というＨＰを作ったものの、全く活用されることがなかった。コロナの感染拡大ということもあって、子ども食堂が縮小されたり、中止になったりという状況の中だったので、あまり、子どもが集まって密になっても行けないということも活用されなかった要因の一つだったと思われる。2022 年度に、仕切り直しをして、子ども食堂や子どもの居場所をやっている人や興味を持っている人に集まってもらって「どんなＨＰがいいか」アイデア出しからおこなった。また、自分たちで更新できるように講習会を持ち、何人かで随時更新できるようにスキルアップ研修会を行った。
４-2. 波及効果
・不登校、ひきこもりの体験をした当事者や、マイノリティーと言われる人の話に耳を傾けることで、自分の持っているバイアスに気づいたり、自分自身の中のトラウマに気づくことになると同時に、子どもや周りの人も自分の価値観を押し付けてしまっていることに気がつくことになり、自分も周りも解放されるきっかけとなる。
支援者にとっても、まずは、子どもたちの支援よりも自己覚知を深め、自分が無意識にとってしまっている行動の意味を知ることが必要である。研修会では、当事者が自分を見つめて一歩ずつリカバリーしていく体験を聴き、単にスキルアップをするということではない、不登校、ひきこもりその他のことがらを深く体感することでできた。
4-3. 事業の効率性
学校に行きにくい児童生徒にとって、非認知能力を高める活動が重要だと 3 年間の活動をとおして実感している。
非認知能力とは、数値化できない「生きていくために必要な能力」ということで、近年、いろいろな場面で聞くようになった。学力や IQ といった数値で測れるものではなく、協調性やコミュニケーション力など数値では測りにくい能力全般を意味し、子どもの好きなこと、興味のあることに対して、時間を忘れて取り組んだり、仲間たちと一緒に夢中になる中でその能力は育っていくのだと考えられる。学校に行きにくい子どもたちは、慢性的なストレ

スの中で暮らしているが、そのストレスから解放されて自分のやりたいことを思う存分することができれば、「自分は自分でいい」という自己を肯定する気持ちが高まるのではないかと思われる。子ども第三の居場所に取り組んだ 3 年間で、そのことを証明することができたと思う。

８．結論

8-1. 事業実施のプロセスおよび事業成果の達成度の自己評価

	多くの改善の余地がある	想定した水準までに少し改善点がある	想定した水準にあるが一部改善点がある	想定した水準にある	想定した水準以上にある
(1)事業実施プロセス		○			
(2)事業成果の達成度		○			

8-2. 事業実施の妥当性

居場所に参加している児童・生徒の保護者の感想

・息子のことで、とても助けて貰い心強くてたくさんのことを学ぶことができました。

少し前、娘もまた息子と同じことをして一瞬にして真っ暗な底なし沼のようなトンネルに落ちました。今回、唯一違うことは、予備知識や居場所があるということを知っていることです。それによってどれだけ救われたことでしょうか。今の私にはそれだけでとても心強いです。

・不登校になり、1 年が経とうとしているが、以前よりも親も子も精神的に落ち着いて過ごすことができている。状況は変わらないし、先のこともまだまだ見えないし不安になる時もあるが、今は子どもが心おだやかに元気で笑っていればいいのかなという思いです。

　欲を言えば、もう少しオルタに通う頻度が多くなって家以外の過ごす場所があればいいのかと思っていますが、それも本人の気持ち次第なので気長に待つしかないのかなと思っています。オルタでの体を動かしたり、イベントなどには楽しく参加させていただいています。今後もよろしくお願いします。

９．提言

・　学校に行きにくい状況になると親子ともに孤立感を深める。このことは、学校に行かないこと以上に苦しい。孤立感が軽減されると、状況は変わらなくても、悩みが悩みでなくなる(困りごとを今向き合うべき課題ととらえられるようになる。)という言葉は、多くの保護者の方から聞くことがで

きた。活動を通して、ピア(仲間)のコミュニティを生むことが重要であると実感した。

学校内にも居場所や親の会を設置している学校もあるが、地域には、不登校をはじめ、発達障がいや学習支援、子ども食堂など様々な子どもの居場所や親の会等の草の根の活動がある。これらの草の根の活動の情報が日常的に誰もが入手できるしくみが必要である。これは、「昨日よりは今日、今日よりは明日の方が、少しでも生きやすく、住みやすい社会に変えていこう」というコミュニティ・アプローチの取り組みでもある。これは、孤立し窮地に陥った子どもたちや保護者への個別の対処療法としての支援の視点を、コミュニティの力を高めて、個々の困難を生じにくくさせたり、周囲が困りごとを早期発見し手を差しのべることで、誰もが自分らしく生きることができる社会を創造していこういう視点を変えることでもある。

しかし、普段から連携を図って信頼関係を構築していないと、学校の教員が、地域の居場所や親の会等を紹介することに躊躇してしまうということも当然である。そこで、年に何回か、学校、民間、行政、家庭の集える場を設けてたらいいのではないかと考えている。

具体的な例としては、毎年 11 月に南信教育事務所主催で不登校の中学生のための進路相談会「ほんわか相談会」が開催されている。県立高校、私立高校、通信制高校がブースを出して、そこに、不登校の状況にあり、進路に悩んでいるご家族が来て各学校の情報を得られる機会となっている。こうした取り組みが日常的に当たり前に開かれる環境が必要だと考える。予防的支援に予算を増やすことは、対処療法支援のための予算を大幅に減らすことにつながるのではないだろうか。

地域社会が、不登校をはじめとする、様々な子どもを取り巻く社会問題を深く理解し、子どもの権利を尊重する社会、住民同士がつながり合い助け合う社会になることが最も重要なことだと思う。

10. 知的・教訓

今回の子どもの居場所づくりを進めてくる中で、出会った言葉は、「非認知能力」という言葉だった。

学力を上げるための詰め込み教育ではなく、生きる力を身につけさせるための「自分で考える力」「感情をコントロールする力」「仲間と意見を交換しながら物事を進めていく力」などを指す言葉で、この能力を身につけるためには、全身を使った遊びや自然体験などがとても良い環境となる。

不登校の子どもたちが、エネルギーを蓄え、再び学びの場や仲間のいる場に復帰していくが、それは、もとに戻って学校へ行かれるようになったということとは全く違う。自分が主体的に選び取って生きる力を身につけたからこそ、それまでの行かされている、やらされている、～ねばならないといった抑圧から開放されて、自分を生きるようになったのだと思う。内面的な大きな成長がそこにはある。このことを(不登校は自立への道)というプラス面をもっと社会に発信してもいいのではないかと思う。

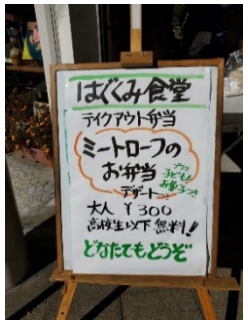
11.　資料

2020 年度

不登校児童生徒の学校外の居場所「オルタ」

花壇づくり

セジュール　はぐくみ食堂



スポーツ

居場所会議

2021 年度の様子

スポーツ

おやつ作り

会食

お花見

ものづくり　販売

ハロウィン

伊那まち BASE　子ども食堂

アドラー心理学講座

2022 年度の様子

森カフェ

パソコン講座

ダンス

人形劇鑑賞

人形作りワークショップ

クリスマスリース作り

スキー

プログラミング

オルタ　文化祭

HP 作成

特定非営利活動法人子ども・若者サポートはみんぐ

子どもの居場所とネットワーク推進事業

上伊那地域が、多様で包括的な地域社会となることで、子ども・若者のみならず、すべての人が孤立することなく暮らすことができる。

2020/4 コロナ拡大 → 2020/10 → 2021/4 → 2021/10 中間評価 → 2022/4 → 2022/10 → 2023/3 事後評価

Outcome 01-1
不登校傾向がある子どもたちが、居場所で安心して自己決定を尊重されて過ごすことができ、自己肯定感を高めて成長していくことができるようになる。

- 候補地伊那福音協会(旧)一戸建
- 「オルタ」allla(アルラ)でOpen
- お弁当のテイクアウト
- HP作成失敗
- 多様な居場所 調理・アート・ボードゲーム・イベント
- ゲームについてスタッフ間の意見相違 タブレットを一旦居場所から引き上げる
- 大人も子どもも ICT教育が必要 体験活動とのバランス スタッフ・保護者の学習会
- 多様な居場所 プラネタリウム 焼き芋大会 高遠歴史散策 マレットゴルフ
- 人形劇を観る
- 子どもたちの利用者が増える5人⇒ 12人
- スタッフの増員
- 2022/11/25～26 オルタ文化祭
- 伊那市教育委員会との話し合い(居場所継続に向けて)
- 居場所に毎回10人以上の利用者がある

Outcome 01-2
不登校傾向の子どもたちが成長していく機会として多様な体験を選択することができる。

- 再開発のためセジュールの取壊し
- 初日から中２Ｍちゃんがオルタに来所
- セジュールはぐくみ食堂 (1年目実施、2年目無し)
- HPを作ればネットワークができる思っていた
- モノ作り教室・アート体験・小物づくり・スキー
- 利用する子どもが増えてきた
- スタッフの補充
- 伊那まちBASE 11月7日オープン 「かぞく食堂」 (子ども食堂)立ち上げ支援
- 駒ヶ根森カフェ月２回 親たちの居場所)
- 駒ヶ根市教育委員会との話し合い(森カフェ継続に向けて)
- 森カフェの参加家族が5、6組ある

Outcome 02-1
上伊那各地の子どもたちが、安心して徒歩で行くことができる居場所が増え、子どもや保護者が孤立しないようになる。

- 縄さん・スポーツインストラクター
- 体育館がコロナで使用できず 屋外で体を動かす 体育館10人前後
- 多様な学び 箱物はいらない情報が欲しい
- はみんぐ×スポーツ 子どもたちの表情生き生きしてきた ストレスが発散できている
- セジュール取壊しにより子ども食堂の拠点がなくなったので、上伊那地域子ども応援プラットフォームに活動を移行
- 親の学習会 信大子どもの心診療室
- 子どもの自立支援パソコン講座　10月～(全10回) Word・Excel・PowerPoint （子どもたちからの要望でタブレットからPCの購入に変更）
- 動画教室(全5回)受講生12人(子3人)・ユーチューバーから学ぶ動画
- 自立支援の講座としてパソコン講座を実施

Outcome 03-1
生きづらさを持つ若者が、仲間と支え合って自己の課題に向き合い、学び合い、リカバリの一道を歩んでいくことができる。

- 高橋さん（ピア・スタッフ） 大場さん、林さん他2名 〔退職教員(小)特別支援〕他
- リカバリーレッジ10月～ 10月オンライン研修 子どもはゲームの中で何をみているか 母親とヒアリング
- アドラー講座10月～ 不登校の子を持つ親の会 保護者7名とコミュニケーション講座を実施
- 生きづらさを持つ若者たちが講座に参加することも困難。保護者・家族の参加も含めた講座を開催する。
- 一人で生きるのではなくつながりの中で生きる
- 伊那わくTVユーチューバー パソコンの先生
- オープン・ダイアローグ 対話を深めるための講座
- HPのページ名変更 アッチコッチステーション (旧)信州こどもネットワーク
- HPのリニューアルにより上伊那のネットワーク促進される。

Outcome 04-1
上伊那地域の子ども・若者に関わる機関・団体・学校がネットワークを構築し、地域のリソースをより詳しく知ることで、支援を迅速かつ適正に行うことができる。

- HPを作ることによってネットワークが生まれる。 (HPが失敗だった理由として)ネットワーク作りが先だった。 みんなの空間居場所ネットワーク
- 各地の居場所をオンラインでつなぐ 野外における居場所を提供
- ネットワークの大切さを感じる
- 子どもたちのタブレットの付き合い方について意見が分かれる
- 上伊那各地の居場所運営者との出会い・つながりの強化
- HPを作成したが今だ稼働していない
- みんなの空間プロジェクト
- HPのリニューアル後 HP更新スキル指導
- シニア大学　タウンミーティング 多様な学びサポーター募集 アッチコッチボランティア募集
- **新たに見えてきた課題、ニーズを踏まえて事業を展開していく。**

体験

連携

文化

Stakeholder Map

- スポーツメイト・子どもたちの在籍する小中学校・フリーキッズ 上伊那地域子ども応援プラットフォーム
- 宮田村人テラス手作り屋（三浦さん）・伊那まちBASE・てんとう虫の会 伊那市社会福祉協議会・伊那市地域おこし協力隊
- ファイヤーサイド・シニア大学・伊那市ミドリナ委員会月1回たき火の日 上伊那地域子ども応援プラットフォーム

みらい基金・伴走支援

- 地域の資源を把握し関係性の構築
- コロナ緊急枠による資金支援

- コロナ禍でも居場所を開設する大切さ支援
- 居場所での多様な支援を提供するため活動の変更・多様化の相談
- リカバリーカレッジ講座の起動修正相談
- 組織基盤が弱い特に会計に苦慮・サポート

- 自律の為の学習支援の相談、支援団体を紹介
- HPを活用したネットワークの構築相談・支援団体紹介
- 居場所だけでなく野外での体験を提供する意義を明確化することを助言
- 組織基盤が弱い自己資金相談
- JANPIA紹介・理念体系づくり講座ワークショップ参加 クラウドファンディング研修

横連携支援

- 体験の提供（いいだ人形劇と繋ぐ）
- 自己資金相談
- 体験格差の数値化 （体験の種類・参加人数）
- 子ども、関係者などの変化、エピソードの提示

- 後継者の創出
  - クラウドファンディング（JANPIA企業連携）
  - 地域との連携強化・ネットワークの構築 キャンピングリゾート駒ヶ根中川村・駒ヶ根・箕輪町・辰野町の新たに生まれた居場所
  - 横連携、多　機関連携（芸術分野）